当院における *Streptococcus　pneumoniae* の検出および薬剤感受性状況

◎羽島 房子[1)]、三浦 悠理子[1)]、千葉 美紀子[1)]、石戸谷 真帆[1)]、庄司 淳子[1)]、勝見 真琴[1)]、阿部 裕子[1)]、藤巻 慎一[1)]
東北大学病院 診療技術部 検査部門[1)]

【はじめに】*Streptococcus　pneumoniae* は市中肺炎の代表的な原因菌であり、敗血症や化膿性髄膜炎などの侵襲性肺炎球菌感染症（IPD）を引き起こすことがある。今回、当院で分離された *S. pneumoniae* について、検出状況、薬剤感受性および血液培養から分離された菌株を中心に莢膜血清型別を行ない、集計を行なったので報告する。

【対象と方法】当院で 2014 年から 2018 年の期間に分離された計 480 株(うち血液培養 13 件)について検査材料、年齢、入院外来区分、性別を年次ごとに集計を行なった。薬剤感受性については、ペニシリン G（PCG）、メロペネム(MEPM)、エリスロマイシン(EM)について耐性率を集計した。莢膜血清型別は検査材料を静脈血、動脈血、膿汁など 28 株を対象とし、型別用免疫血清(デンカ生研)を用い、凝集法にて行なった。

【結果】検出件数は 5 年間で計 480 件(2014 年より 97 株・119 株・ 99 株・ 85 株・ 80 株)であった。年齢は 65 歳以上が 42%で最も多く、入院外来比は 1：1、男女比は 6：4 で年次推移はなかった。薬剤感受性は、中等度耐性（I）以上を耐性として耐性率集計を行った。PCG 耐性率の 5 年間の平均は 42.9%で年次推移は認められなかった。入院外来区分の PCG 耐性率は 5 年間平均で入院 46.8%、外来 37.7%と差異が認められた。MEPM の耐性率は 5 年間平均で 19.8%、年次推移は 2014 年から 2018 年まで 14.4%・ 19.7%・ 19.2%・ 26.5%・ 20%と上昇傾向であった。EM の耐性率は 5 年間平均 88.4%で年次推移は特に認められなかった。莢膜血清型別については、3 ・ 12 ・ 22 ・ 33 型が各 2 株、2 ・ 6 ・ 7 ・ 11 ・ 15 ・ 19 ・ 23 ・ 32 型が各 1 株、型別不能が 10 株であり特に集積した血清型は認められなかった。

【考察】当院の *S. pneumoniae* の分離状況を集計した結果、PCG 耐性株の増加傾向は認められなかった。しかし、MEPM は近２年間で耐性率 20%以上と耐性化傾向が認められ注意が必要と思われた。莢膜血清型別では、6 ・ 19 ・ 23 型は PCG 耐性株が多いとされているが、今回当院で検出された 3 株は中等度耐性株であった。今後も薬剤耐性傾向と莢膜血清型別との関連について注視して行きたいと考えている。

(連絡先：022-717-7388)